

Cytokeratin 染色陽性，Vimentin染色陰性であり，腺癌と考えられた。

26. Large cell neuroendocrine carcinomaの1例

長崎大第1外科 田村和貴
岡 忠之，山口栄一郎
森永真史，赤嶺晋治
高橋孝郎，綾部公懿
同 医療技術短大部 田川 泰
症例は58歳，女性。主訴は咳嗽，血痰。胸部X線上，右上肺野に異常影を認めた。胸部CT，気管支内視鏡検査の結果，右S2の原発性肺癌の疑いで平成8年11月7日右上葉切除を施行。組織学的にLarge cell neuroendocrine carcinomaと診断された。病理病期はT2N0M0，stage Iであった。本腫瘍は小細胞癌と同様に予後不良であるとされ，自験例も術後1年1ヵ月で中葉に再発，死亡した。今後，有効な補助療法の検討が必要であると考えられた。

27. 同一病変内に肺癌と結核腫が併存した1例

長崎大放射線科
松山直弘，芦澤和人，沖本智昭
林 秀行，長置健司
松岡陽治郎，林 邦昭
同 第1外科 赤嶺晋治
高橋孝郎，岡 忠之，綾部公懿
症例は72歳男性。平成6年より検診で胸部異常影が認められていたが，経過観察されていた。平成9年12月，他院で施行されたCTでも陳旧性肺結核が疑われたが，TBLBにて肺腺癌の診断を得た。平成10年2月，当院1外科で左下葉切除術が施行された。病理所見では，腫瘍の大部分は結核による乾酪壊死で一部に腺癌が認められた。本例のCT像と病理所見を対比し，文献的考察を加え報告する。

28. 著しい高カルシウム血症をきたした巨細胞を伴う肺大細胞癌の1例

大分医大第3内科 坂田恵子
杉崎勝教，吉松哲之，松本哲郎
葦原義典，沢部俊之，重永武彦
津田富康
症例は51歳男性，平成8年11月からの右背部痛，発熱，咳嗽のため近医を受診。胸部CTで右S6に腫瘤影，骨シンチで異常集積を認められ，12月9日当科紹介入院。白血球増多，著明な炎症反応，高Ca血症を認め，血清PTHrP，NcAMP，G-CSFの上昇を認めた。入院後に出現した皮下腫瘍の生検組織より巨細胞型大細胞癌と診断。呼吸不全が進行し，第49病日に死亡した。生検組織の免疫組織化学による解析も併せて報告する。

29. 塵肺患者における肺癌発症について—当院3年間の臨床学的検討—

長門記念病院内科 河野昌也
三浦 肇，阿南公展
後藤陽一郎，清水正嗣
近年，所見が軽症化している珪肺患者群の中，肺癌合併症例を疫学的及び臨床学的に検討した。当院塵肺患者992名から最近3年間で，12名の珪肺合併肺癌を認めた。そのうち4名が死亡，珪肺患者の標準比死亡率は175となり，珪肺から肺癌死しやすい事実が判明した。12症例はすべて男性で平均年齢は73.5歳，重度喫煙者が多く，組織型は扁平上皮癌(5例)が多い事に加え進行症例が多く，外科的治療対象にはならなかった。

30. 肺癌の胃転移に対し，胃全摘術を行い，ADLの拡大をみた1例

健康保険南海病院 藤井宏透
国立大分病院 雨宮由明

有田和弘，一宮朋来，河野 宏
症例は72歳男性，肺低分化型腺癌(T₂N₀M₁)にて治療経過中に，多発性胃転移を認めた。同部よりの出血により高度貧血を認めたと，内科的止血困難のため，胃全摘術を行った。肺癌の消化管転移は剖検例を含めて4%程度と報告されているが胃転移が生前に診断されることは稀であり，さらに今回は胃全摘を行うことによりADLの拡大が可能となり，食事摂取，一時退院が可能となったので報告する。

31. 肺癌における病名告知と全身抗癌化学療法効果の検討

熊本地域医療センター呼吸器科
瀬戸貴司，千場 博
瀬戸真由美，西田有紀
深井祐治

癌告知が治療経過に及ぼす影響を5HT₃受容体拮抗剤が予防投与され，全身抗癌化学療法が施行された75歳以下，PS0-1症例143例を対象に検討した。告知の内容を他疾患群，前癌病変群，病名告知群，不治告知群に分けて検討を行ったが，非小細胞肺癌では正しい告知が行われるに従って，治療コース数や再燃時化学療法施行率が有意に増加し，告知群の治療予後は非告知群に比べ統計学的にも有意に良好で，告知内容が予後に影響を与えていた。

32. 原発性肺癌と鑑別が困難であった肺滑膜肉腫の1例

大分医大第2外科 中城正夫
三浦 隆，三浦源太，内田雄三
同 第2内科 水之江俊治
永井寛之，那須 勝
同 中央検査部 横山繁生
大分県厚生連鶴見病院胸部外科 田中康一
症例は58歳の女性。平成9年7月より血痰と咳嗽が出現し，